

霜のうへにとびかふ鳩 鳩のひな鳥 かづく鳩鳥 たまにもあそぶ 鳩鳥のあしのいとな
き 鳩鳥の冰の瀬にとぢられて うきすにそだつ すぐ鳩鳥の浮も沈も 波の下道水く
ぐる

〔和爾雅六禽鳥〕鶴鷗
〔カイツブリニホガモ〕鶴食似鷄而小

〔物類稱呼二動物〕鶴鷗かいつぶり是和歌に詠するにほど、畿内及中國東武共にかいづぶりとい
ふ。上總にてみほといふ。長崎にては鳩といふ。土佐國にていちづぶり。又いよめといふ。遠州にて
めうちんといふ。東國にてむぐつ鳥。武の神奈川にてでつてうむぐつてうといふ。上總かはぐる。
まといふ。信州にてめうないと云。駿河にひやうたんごといふ。仙臺にてかはきじといふ。略○中

今按に、鳩はにはひ鳥の意也。略○中にはふとは香のこと。あらず艶色のこと也。光源君のこと
を、桐壺の巻に、此御にはひにはといへり。又法橋昌長翁のいはく、研師刃を研上て、それに色を
付るを、にはひをつけるといふ。則鳩の脂を引となり。

〔東雅十七禽鳥〕鴨カモ○中 略 鶴鷗の如きは、楊子方言に據るに、野鳧之小而好沒水中者也と見えしは、
上古にニホと云ひ、今俗にイヨメとも、カイツブリともいふもの、大者謂之鶴鷗と見えしは、韓保
昇が説に、刀鴨といふもの、即今俗に小鴨といふものと見えたり。略○中 ニホとは湖をいひぬれば、
ニホトリとは、湖中にあるの義にやあるべき。略○中 イヨメといふは、ニホメの轉せしなり、カイツ
ブリといふは、京畿の俗カイといふは、猶乍チマチといふが如し、ツブリとは、その水に没する音をかた
どりいひしなり、鳩の字を用ひ、ニホと讀むは、我國の俗創造りし所と見えたり。

〔本朝食鑑五水禽〕鶴鷗
〔訓保仁〕

集解、鶴鷗似鴨而小、大於小鳧、頭背翅尾蒼而帶赤、似驥色頰及領下頸前紫赤、胸黃有紫斑、腹白嘴黑
而短、紅掌、好泛游出沒于水、或相對相伴旋廻于水上、故歌人賞詠之、其味有臊而不佳、其膏塗刀劍不